

# 真如隨縁の根底にあるもの

田 淵 正 宗

起信論に於て、心生滅即ち現象界の本源は何であるかと言うに、それは阿梨耶識であると提示する。先ず生滅の現象界は何に依つて起るかと言うに、如来蔵に依るが故に生滅の心ありとする。そこで此の如来蔵が出てくるまでの経緯を確認してみると、

一、真如は一法界大總相法門の体であり、従つて一切法に真如は内在すると言うのは本論の根本的立脚地である。

二、然も真如そのものは自性情淨にして不生不滅のものである。これまた本論の真如に対する基本的命題である。

三、では如何にして生滅現象界は生じたか。これ生滅門の必ず説明されねばならぬ命題である。

以上三つの命題を総合して真如を真如そのままでなく、

対象生的真如としての如来蔵を提出したものと思う。如来蔵なしには現象界の説明が出来なくなる。換言すれば真如門と生滅門を一体の両面としてこれをつなぐ主体は如来蔵でなくてはならぬ。故に如来蔵は生滅界に内在する具體的の真如として、真如と生滅を関係づけるものとして要求せられたものであり、此の如来蔵に依つて初めて流転還滅の生滅が可能となる。

次にその本源として本論では阿梨耶識を提示している。今有るところの生滅現象は無明による。無始以来真如に附きまといつて無明が、真如を真如と理解せず法界一相の理に達しないためである。その無明は私共に取つて如何なる位置を取るものかと言うと、それは阿梨耶識の中にある。実を言えば無明は阿梨耶識の作用であり、無明あるが故に阿梨耶識の名を得るのである。故に無明に

依つて吾等は純粹真如的存在でなく、阿梨耶識的存在となつてゐる。

では、生滅心の根本的な姿としての阿梨耶識を定立しその生滅的の素質は無明にありとするならば何故に無明に依つて生滅の心有りと言わないのか？ 又その反対に如来蔵が在縁の真如ならば何故に真如に依りて、生滅の心有りとなしないのか？ これは極めて重要な問題だと思ふ。此の句の解釈の如何によつて、生滅門全体に対する甚だしき誤解が生じ、且つ本論の主張を曖昧にする。

故にここに義記の解釈を指南として考察してみたい。

謂真如有二義。一不變義。二隨緣義。無明亦三義。一

無体即空義。二有用成事義。此真妄中。各由初義故成上真如門也。各由後義故成此生滅門也。此隨緣真如及成事無明亦各有二義。一違自順他義。二違他順自。無明中初違自順他亦有二義。一能反對詮示性功德。二能知名義成淨用。違他順自亦有二義。一覆真理。二成妄心。真如中違他順自亦有二義。一翻对妄染顯自德。二内薰無明起淨用。違自順他亦有二義。一隱自真体義。二顯現妄法義。此上真妄各四義中由無明中反對詮示義。

及真如中翻妄顯德義。從此二義得有本覺。又由無明中能知名義。及真如中内薰義。從此二義得有始覺。又由無明中覆真義。真如中隱体義。從此二義得有根本不覺。又由無明中成妄義。及真如中現妄義。從此二義得有枝末不覺。此生滅門中。真妄略開四義。広即有八門。若約兩兩相對和合成緣起。即有四門。謂二覺二不覺。若約本末不相離。唯有二門。謂覺与不覺。若鑒融總攝。唯有一門。謂一心生滅門也。又若約諸識分相門。本覺本不覺在本識中。餘二在生起識中。若約本末不二門。並在一本識中。故言此識有二義也。(大正藏 四四・

二五五C 二五六A)

この文からわかることは、阿梨耶識の如何なるものかを極めて巧妙に分析して組織的に述べているものであつて、賢覺大師が玄奘三蔵の唯識宗に對抗して真如隨緣の義を主張して華嚴の教学に導かんとした苦心努力の結晶が、此の一段の説明となつたと見るべきだが、それは兎に角として、此の文にある真如と言う語は真如門に於ける真如ではなくて、無明を予想した相対的な真如である。故に此の真如と言ひ無明というのは、実は吾等凡夫の識

たる真妄和合の阿梨耶識のみである。故にこの識は上に向つては還滅の道を辿り、下に向つては流転の道を行く可能的存在である。此の具體的の阿梨耶識を分解して流転還滅の過程を明かにせんが爲に、真如と無明とは分解し抽象して、説明の根本原理となしたものであると見られる。

文中、真如と無明の各々に違自順他の義があると言うことは、何か矛盾を覚えるが。これは即ち真如は他（無明）に違いて、自（真如）順い、無明は他（真如）に違いて自（無明）に順うことは各々の本来の性質に従つて仿くのであるから当然のことであるが、真如は反つて無明に従い、無明は反つて真如に従うことは、各々の自性に背いた反対の作用を起すのは如何なる理由かと。これ即ち無明と真如とが本来阿梨耶識から抽象されて二つに分解された結果である。

本来真如と無明とが各々対立した独立の原理とすれば、各々の自性のみ守るべきであるが、元來が阿梨耶識の自性に具有せる二つの属性であつて具體的には渾然一体である。

故に真妄何れが仿くも阿梨耶識として全体が動くのである。義記に屢々「挙体随動」というのは此の意味である。従つて真妄何れが動いても相互に影響を受けざるを得ない、だから具體的な一心識の作用としては真如無明の二の性能は自性に順すると同時に、他性に動かされて自性に反するものであるといえる。このように具體的本識の性能を抽象して原理としたのであるから各自性に反する性能が認められなければならぬと考えられる。若しそうでないと、此の原理に依つて妄界への流転も又真如への還滅をも説明し得ないことになる。

例えば、蠟燭の光を覆えば室内は暗黒になる、其の暗黒になつたのは、光を覆う物体があつたからであるが、然し此の場合蠟燭の光にも、物で覆われれば暗くなる、即ち自らの体を隠すと言う性質と、暗を現ずると言う作用とを認めることができるのである。真如に於ける隠体、現妄の二義も亦このようなものであり、無明に於ける違自順他も同様である。

要するに真如と言ひ無明と言うのは、生滅門に於ては、阿梨耶識から抽象せられた概念であつて、これを説明原

理として阿梨耶識を中心とせる各種の關係と連絡とを明了にしたのが此の義記の解釈である。

さて、最初の問題に還つて、何故に「無明に依るが故に生滅の心あり」と言わなかつたかと考えると、文中からもわかるように真妄同時にではあるが、本論では本覺は所依の体にして無明は能依の相である。而るに体相の關係は相に依つて体があるのでなくて、体によつて相があるのであり、体なければ相はないから無明には別に体はないということになる。

従つて恒久不變の實體的存在でない無明を主体とし中心として、現象があるとは言えない、何故ならば現象は必ずその一面に於て、實在的恒久性を持つ存在であるから、無明はその存在の本質的な根拠とはなり得ない。

次に何故に「真如に依るが故に……」、と言わなかつたかと言うと、真如から生滅心が生じたと言うことは、現實の衆生には、直接には説くことができない。我々凡夫が法性真如の都より迷ひ出たと言う如きことは一種の要請としてのみ許される文学的表現にすぎないのである。何より「不生不滅」と言う根本規定に矛盾する。

義記には真如に不變、隨縁の二義があるとし真如一元に依る流出的縁起哲学と本論を解する立場もあるが、不變と隨縁とは何としても矛盾せる概念であつて、少くとも同一列に同じ資格をもつて真如を規定することは許されない。同一真如が不變にして變ずと言うような全然矛盾せる規定を有することは特に注意すべき点だと思ふ。

隨縁とは、縁は無明のことであるから、この真如は無明を予想している。換言すれば、隨縁とは真如は真如のみで独存しているのでなくて、無明を予想して同時に存在することを意味するものと解釈しなければならぬ。不變の真如が隨縁して無明と同時に同処に存在すると言うことは、之を具體的に言えば、如来藏である。義記に「不生不滅の心、挙体動ずるが故に心は生滅の相を離れず」(大正藏・四四・二五四・C)とはこの意味と考えられる。

又無明の二義として、無体即空と有用成事とが挙げられるが、無体のもので作用があり、空のもので事を成ずということも全く矛盾した規定であつて、實體としての真如を予想しなければ理解できない。而かもそれは抽象

された理体としての不変の真如でなくて、隨縁した具體的の真如を無明と同時同処に予定しなければ、無明の二義は成立しない。之を具體的に言えば、生滅心の基点に立つ阿梨耶識でなければならぬ。

従つて本論の根底に流れるものは、真如一元の縁起ではなく、無明を予定せる不変の真如、即ち如来藏縁起の思想であると思われる。

義記に「唯真不生单妄不滅」(大正藏・四四・二五五・A)と言うのは、此の点を簡明に指適せるものであつて、

本論は決つして不変の一理体が隨縁して諸法を生ず、即ち變化しない真如が變化して如来藏となり、生滅心となり万有となつた。と言うような無明の処置に窮するような説ではない。

唯識宗では、「真如は凝然として諸法を作らず」と言つてゐるが、これは阿頼耶識の実性として別個に真如を立て、真如を識と独立に見る立場からは当然の主張である。本論では如来藏としての真如であるから、不変、隨縁の二義ありとなすのも亦当然のことと思われる。

真如に異りはない。尤も本論が具體的な衆生心を分

解して、今まで述べてきたように如来藏から抽象された真如と、阿梨耶識から抽象された無明とを説明原理として此の二元交渉關係を以つて理論の条理を明かにした点は、多分に真如縁起思想と解釈せられやすいように構成されてはゐる。しかしそこでは後半の理論展開に至つて破綻をきたし、多くの矛盾を犯すことになつてしまふ。

従つて真如隨縁の根底にある思想的背景は本論の場合如来藏縁起であると考えらる。